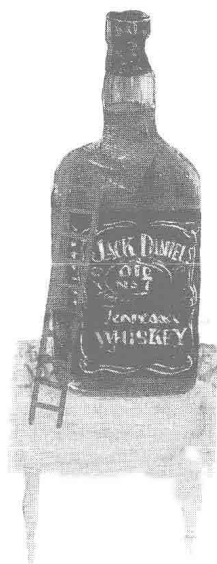


山川健一
真夏のニール



夏のニール

山川健一



真夏のニール
まなつ

一九八八年八月一日 第一刷発行

定価 一、二〇〇円

著者 山川健一
やまかわけんいち

装丁 スタジオ・ギブ

装画 八木美穂子

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

〒三〇〇 東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇

出版部 (〇三) 二三〇一六―〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇 六三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六―〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

本書の内容の一部または全部を無断で複製、複製、転載することを禁じます。

© 1988 K.YAMAKAWA, Printed in Japan

ISBN4-08-772663-0 C0093

真夏のニール

二一

n. 無。皆無。零。競技の得点がまった
く入らないこと。コンピュータ用語で、
空欄、ブランク。……そして、とり戻す
ことのできない記憶。

われわれは地球の目であり、
耳であり、

われわれの考えることは地球的思考である。

ライアル・ワトソン / 村田恵子訳

街路の熱気の上には熱気がかぶさり、頼りなく吹いていく風も灼けつく熱をはらんでいる。摂氏三十度を超える大気の層が地上一万メートルもつづいているのではないかと思われた。アスファルトの路面はぐにやりと溶け出し、ぎっしりと列をつくるクルマのエア・コンディショナーはほとんど役に立たなかった。

停まったクルマの中から、ドライバー達は苛立たし気に電話をかけている。

家庭やレストランの台所では、配給されたばかりの肉や野菜が腐り、甘い臭気をたてているに違いない。

高い空は澄みきり、地上に降りそそぐ太陽の光を妨げる雲の存在は、もう長い間その姿を見ることができなかった。都市は、永遠に雨の恵みから見放されてしまったかのようにだった。気象学者達は競ってこの猛暑についての仮説を述べたが、炎天下、清涼飲料水を買いたいとめるためにコンビニエンス・ストアに集まり、レジ・カウンターに列を作った主婦達の苛立ちはおさまりそうにもなかった。あちこちで、この気が遠くなるほど暑い夏が原因だとは思えない傷害事件や、自殺行為に等しいクルマの暴走が相ついでいた。

そんな夏がじまったのは、わずか半月ほど前のことだ。

太陽が高層ビルディングのガラス窓をオレンジ色に染めながら街の向こうに沈んでいった後も、都市を被ったコンクリートから熱気が退くことはなかった。誰もが息をひそめ、雨が運んでくるはずの、肌に優しい涼気を待ち焦がれている。

ぼくは、フィルムを収納した冷蔵庫の隅からビールを取り出した。それが、最後のビールだった。だが構いやしない、と思う。アルコールは、今や缶ビールしかのこっていなかった。ジャック・ダニエルズもマイヤーズのラムもJ&Bも、ゴードンのドライ・ジンも、ボトルはすっかり空になってしまっている。空の酒壇が、キッチン^の隅にずらりと並んでいる。

冷蔵庫のドアを閉めて缶のトップを抜き、よく冷えたビールを、流し台の上に置いたグラスに注いだ。

片手にグラスを持ち、板張りのフロアーに散らばった雑誌やカメラの器材を踏まないように気を配りながら、窓辺へ歩く。ブラインドに指をかけ、九階の部屋から街路を見下ろした。静かだと思っただが、なんのことはない、ぎっしり詰まったクルマが身動きできないだけのことだった。朱味を帯びはじめた夕刻の太陽に照らされて、シルヴァーやブルーやイエローのクルマの屋根が鈍い光を放っている。

グラスのビールをひと飲み、それから洗面所へいった。グラスを手にしたまま、鏡を覗き込む。顎のあたりに無精髭をためた、頬の肉が削げ落ちた男の顔があった。額に前髪がかかっている。かさかさに乾いた唇。几帳面に、いちばん上までボタンを留めたオフホワイトのシャツ。そして、少しばかり赤い、輝きを失い濁ってしまった目。おれはアルコール中毒なのだろうか、とぼくは考え

る。そうかも知れない。だが、仕方なかったのだ。アル中の男なら誰でもそう言うに違いないが、ぼくは飲まずにはいられなかったのだ。自分ひとりだけの夕食を作るために、ビールかウイスキー抜きでキッチンに立つことができる男なんて、この世の中に存在するのだろうか。

空になったグラスを洗面台に置き、ぼくは顔を洗う。

その時、チャイムが鳴った。

ぼくはタオルで顔を拭き、リビングルームに戻った。もう十年近く愛用している、フィンランド製の羽毛のソファに腰を下ろす。ブラインドから洩れる光が、板張りのフロアーに光と影のラインを刻みこんでいる。もう一度、チャイムが鳴った。ぼくはリモート・コントロールのスイッチをオンにする。一瞬の間があり、時計の下に置かれた18インチのモニターTVの画面に、鉄の扉の向こうの映像が映し出される。

黒っぽいスーツを着こみご丁寧にタイまで締めた小肥りの男が、ハンカチで額の汗を拭いながら立っていた。年齢は、四十歳ぐらいだろうか。初めて見る顔だった。頬骨が張り、顔の真中に突き出した大きく立派な鼻の頭は赤い。赤鼻のトナカイだ、とぼくは思った。整髪料のつけ過ぎなのか、オールバックにした髪はてらてらと光っている。背丈は、そんなに高いほうではない。

「どなたですか」

ぼくは、モニターTVの画面に向かって言った。TVの下にはアンプリファイアーが置かれ、マイク・クロフオンもセットされている。男は顔をあげ、こちらを、つまりドアの上に備えつけられたカメラのレンズを覗きこみながら言った。律儀な性格なのだろう。

「木元杜男きもとむりおさんですね？」

「セールスならお断りです」

「そうじゃないんです」

男は、一度カメラから視線をそらせる。ぼくが黙っていると、ハンカチで首筋の汗を拭いながら再びカメラを覗きこみ、しかし何か言いかけて口ごもった。

若干の敵意と警戒の気持ちをこめて、ぼくは言った。

「用件をおっしゃったらどうですか」

「あとう、つまり、仕事の依頼なんですけれども」

「わたしの仕事をご存知ですか？」

男は黒革の鞆を足許に置くと、上衣の内ポケットから手帖を取り出した。

「木元杜男さん、三十六歳。フォトグラファー。報道カメラマンとして通信社でご活躍なさっていました。五年前に独立。それからは雑誌を主な媒体として、さまざまな、まあ、女の人の裸とか、旅行ものとか、時にはコマースシャル写真をお撮りになってますね。しかし、この度当委員会が特にあなたに仕事を依頼したいと考えましたのは、あなたが一連の森の写真をお撮りになっているからなんです」

よく通るバリトンでそこまで喋ると、男は手帖をポケットに戻した。かるく息を吐く。

ぼくはリモート・コントロールのスイッチを押し、男の鞆を透視する。いくつかの書類と、名刺入れか、あるいはシガレット・ケース。万年筆と、眼鏡。ナイフや44口径は入っていないようだった。このオフィス兼自宅には、通信社時代からの膨大なネガフィルム、ポジフィルムが保管されている。その中には、さまざまな理由から公表できなかったものも含まれていた。いまさらそれら

のフィルムをどうしようというわけではない。しかし、時には脅迫まがいの電話がかかってきたりもするのだ。用心するにこしたことはなかった。

モニターTVのスイッチを切り、ぼくは玄関のドアを開けた。

「どうぞ」

「ああ、どうも」

男は床に置いてあった鞆を持つと先に立って部屋に入り、勧められもしないのに勝手にソファに腰を下ろした。ぼくはソファの向かい側に置かれたキャスター付きの椅子に腰を下ろした。柑橘系のオーデコロンかヘアリキッドの匂い。赤鼻のトナカイは、無遠慮に部屋の中を見回している。

ぼくがジャマイカで撮ったアーモンドの樹の写真を使ったポスターを見て、トナカイはうなずく。呼吸、とりもどそうね！というコピーが刷りこまれた化粧品ポスターである。

窓際に置かれた、カシの木で作った丸テーブルの上には、何台かのカメラが無造作に置かれ、郵便物が積み上げてあった。ぼくが撮った写真が掲載されている雑誌、パンフレット、銀行からの振り込み通知、カード会社からの請求書。

「お嬢さんですね？　今は、確か七歳になられてるはずでしたね」

ステンレスのフレームで縁取られた、まだ歩きはじめたばかりの頃の素子のモノクロ写真を見ながら、赤鼻のトナカイがぶ厚い唇を動かして言った。ぼくはあいまいにうなずき、言った。

「で、ご用件は？　委員会だとかなんとかおっしゃってましたね」

「おくれましたが、わたくしこういう者です」

トナカイは鞆の中から名刺入れを取り出し、一枚の名刺を応接用のガラス・テーブルの上に置き

た。ぼくは、そいつを手にとってみる。

マインドランド委員会
秘書

島 路 大 助

TEL 420・××××

ぼくが名刺から視線を上げ、今や赤鼻のトナカイではなく、島路大助という名前の赤い鼻の男として認識された相手の顔を見ると、相変わらずオールバックの髪を光らせ柑橘系のオーデ「ロンカヘアリキッド」の匂いをふり撒きながら、彼は特徴のない澄んだバリトンで言った。

「今後、よろしく願います」

大した理由があつたわけではないが、ぼくは笑つた。笑いながら男の顔を見ると、当然のことかも知れないが、男は笑うどころか何か重大なことでも考えているような顔をしている。いや、実際に重大なことを考えていたのかも知れないが。

ぼくはうつむき、ひとつ咳払いをしてみる。今日は少し飲み過ぎたかな、と思う。朝から、シリ島から持ち帰った自然塩をつまみに、最後にのこったドライ・ジンを飲みつづけていたのだ。「えーと、マインドランド委員会、秘書の島路大助様。ずいぶん立派な肩書ですね。マインドラン

ド委員会、ML委員会……マルクス・レーニン主義。革命でもやろうっていうんですか？」

「まさか。地球の未来を考えるのが当委員会の目的です。まあ、突然こんなことを申し上げてもピンとこないでしょうが」

ぼくは、これからさらにもう一本、ジャック・ダニエルズであろうがラムであろうがスコッチであろうが、何でもかまわないから酒のボトルを飲みほしたい気分だった。

「ぼくは一介のカメラマンですよ」

「あなたの森林の写真はすばらしい」

「ありがとうございます」

「ああいう写真は、単に技術だけで撮れるものではない。そうでしょう？」

島路大助がその肥った体を乗り出し、煙草に火をつけようとしていたぼくは上体をそらす感じになる。島路大助はソファにかけ直し、またハンカチで汗を拭う。

「言っておきますが、ぼくの仕事は写真を撮ることですよ」

「わかっています。説明するのが非常にむずかしいのですが、さまざまなことを省略して、きわめて簡単に言ってしまうば、マインドランドの写真を撮っていただけなのです」

「それは遊園地か何かですか？」

ぼくは、もう何年も前に素子と比呂子の三人で行ったことのある、埋め立て地に作られたディズニールランドのことを思い出しながら言った。マシュマロみたいなほっぺたの、素子の笑顔が思い出される。ミッキーマウスの縫いぐるみにおいておいでをしながら、いこう、いこう、と話しかけていた素子。

あの頃は、ぼくがこんなふうになんか飲むこともなかった。ようやく歩きはじめた素子はよくこのソファに腰かけ、手を叩いてはしゃいだりしていたものだ。朝食こそぼくが用意することもあったが、昼食や夕食は比呂子がつけてくれたし、膨大なゴミを指定された曜日に棄てるのも比呂子の役目だった。バスルームが異臭を放つことも、さまざまな集金を滞納することもなかったはずだ。

「遊園地ではありません。今の段階では異次元空間に、換言すれば数値の中にしかありませんが、近い将来この地上に具体的に現出するはずの世界です」

ブラインドから射しこむ光のラインが、丸テーブルの脚のあたりまで届くようになった。ぼくは窓辺に立ち、今度は向かい側のビルの窓を覗いてみる。太った体や痩せた体をさまざまな色のレオタードに包んだ女達が、脚を上げたり腰をひねったりしている。彼女達の動きに視線を投げかけたまま、ぼくは言う。

「異次元空間に、あるいは数値の中にしかないものを写真に撮れとおっしゃるんですか？」

「そうです。ただし、一眼レフを使うのではなく、あなたのマインドを使ってね」

振り返ると、大きな赤い鼻の頭にしわを寄せ、男は微笑んでいる。

「なんだか、よくわからない話だけど」

「無理ありません。しかし、是非ともお引き受け頂きたい」

エア・コンディショナーが低くうる音が続いていた。もう旧型だったから買い換えなければならなかったのだが、今年の夏はこの店に行ってもクーラーの在庫などはありはしなかったのだ。

「詳しいことは、お引き受け頂いてから当方のオフィスでご説明させて頂くつもりなのですが」

「しかし、これではあまりにも話が漠然としていて」

男はしばらく考えていた。

沈黙。

やがて、男は言った。

「いいでしょう。それでは、あのテーブルの上をかたづけて下さい」

男は、窓際に置かれた丸テーブルを指さした。ぼくは立ち上がり、テーブルの上に置かれたカメラや郵便物、ブルースを吹くためのハーモニカ、ぼくが撮った写真が掲載されている雑誌、パンフレット、銀行からの振り込み通知、カード会社からの請求書などをきれいにかたづけた。男の言葉には、そうさせずにおかない不思議な力がこもっていた。

「明かりを消して下さい」

ぼくは明かりを消した。ブラインドを下ろしてある部屋は、仄暗くなる。島路大助とぼくは、カシの木で作った丸いテーブルをはさんで向かい合った。

「わたしの手のひらの間を見てください。心を落ち着けて、この世界で最も良きものをイメージするのです」

男は、今までとは違った静かな調子で言い、左右の手のひらをテーブルの上に、焚火にてもあたるようにかざした。ぼくは彼の手のひらの間を覗きこむ。

「さあ、心を落ち着けて、この世界で最も良きもののことを考えるのです」

深い湖を覗きこんだ時のように、男の手のひらの間にすいこまれてしまいそうな気がした。やがて、男の手のひらの間がぼんやりと光りはじめる。きらきらした透明な光は、やがてサッカーボールほどの大きさの球になった。

光の球がテーブルの上に浮かんでいる。

透明な光は、中心から、少しずつグリーンに染まっていく。ぼくは息をのんだ。

よく見ると、輝くグリーンは森なのだった。陽光をいっぱいに浴び、新鮮な葉を風にそよがせる樹木がくつきりと見える。テーブルの上に浮かんだ森が、美しい光を放っているのだ。

「マインドランドです……」

男の声が、どこか遠くから響いてきた。

2

スクリーンには、森のスライドが映し出されている。中部地方を長期取材した折、クルマをキャンプ場に置き、溪流沿いにビヴァークしながら撮影した巨大なブナの樹の写真だ。ひとり旅だったし、テントを張るのが面倒だったのだ。4輪駆動のクルマで林道を走り、クルマの中で眠ったり、気が向くと時にはシュラフにもぐり込み、星空を眺めながら眠るのだ。夜露をしのごう簡単な屋根さえ作れば、快適なものだ。

たくましく、ごつごつと張った太い根がフレームいっぱいには広がり、幹がそびえ、上方に梢が写り込んでいる。空は、白くとんでしまっている。それだけ樹木そのものが際立ち、ブナの生命感を表現するいい作品になっている、とぼくは思う。葉がかすかに揺れ、風が吹いていることがわかる。かかとのすりへったワークブーツを履いたままソファに横たわったぼくは、テーブルの上のワイングラスに手を伸ばした。昨夜買ってきてすぐに冷蔵庫に入れておいたワインは、よく冷えており、

ガラスの表面には水滴がたまっている。白ワインを、ひと口飲む。何も食べずに飲みつづけているので、吐きそうな気分だった。だが、それでも飲むのをやめられないのだ。風の感じを思いだせそうだ、とぼくは思った。樹林の、思いのほか強い匂いも蘇ってくる。

体に手応えがある力がみなぎってくる気がする。ブナの古木が、ぼくに力を分け与えてくれるのだ。

比呂子は、もしかしたら素子を連れてきてくれるつもりかもしれない、と考える。やはり電話してよかった。もっと早く連絡するべきだったのだ。気持ちちが昂揚してくるのがわかる。もう七歳だものな、と思う。どんなふうになっているのだろう。大人になった時の顔さえ想像できるかもしれない。

こうしてスクリーンに映し出されたブナを見ると、落ち葉が堆積し湿った地面に腹這いになり、木洩れ日を浴びながらシャッターを切った、十年前の自分を包む空気の感じまで思い出せそう。ワインを、もうひと口。ブラインドを下ろした窓の向こうに、夜の森林が広がっているような気がしてくる。空には目映い^{まばゆ}星々の光がある。

リモート・コントロールのスイッチを押すと、無機的な音がエア・コンディショニングされた快適な部屋にこもるように響き、次のスライドがあらわれた。

一本の樹木が、高く青い空を刺し貫くようにそびえている写真だ。ぼくは深々と息を吐く。広角レンズで撮られたその糸杉がどこにあったのか、よく覚えていない。南フランスだったろうか。あるいは、スペインだったかも知れない。だが、いずれにせよ、炎を思いおこさせるその一本の糸杉には力がこもっている。水と養分、そして陽光を枝の先にまでみなぎらせ、広々とした麦畑の中に

そびえ立っている。糸杉の脇を通る舗装道路は波のようにせり上がり、丘の向こうへ消えている。白く光る道路の向こうは、澄みきった空だ。

その時、電話のベルが鳴った。

「木元です」

ほんの一瞬の沈黙があった後、女の声が聞こえてきた。

「比呂子です。今夜待ち合わせした店、どこだったかしら。メモしなかったもんだから、忘れちゃったの」

確かに比呂子の声だった。ぼくは、二人でよく行ったレストランの名前を言った。

「そうだったわね。ごめんなさい」

「大丈夫か。忙しいんだったら、また今度にしてもいいんだぜ」

スライドに映し出された糸杉を見つめながら、ぼくは言った。

「いいえ、わたしも楽しみにしていたんだから。じゃあ、七時に」

「少しぐらい遅れてもいいよ。飲みながら待つてるから」

比呂子が電話を切ろうとし、ぼくは口ごもる。

「なに？」

素子を連れてくるつもりなのかどうか聞きたかった。だが、言い出せなかった。

「いや、いいんだ。じゃあ後で」

受話器をおくと、ぼくはスライドを次々にスクリーンに映し出していった。

そして、結局、最初のブナの古木のスライドを選び、封筒にしまいこんだ。